

平成18年5月学術講習会

(社)日本鍼灸師会
(社)東京都鍼灸師会

主催

厚生労働省後援 通算 653 回
(2006.5.28)

演題および講師

婦人科疾患

・「婦人科腫瘍」

早期発見・早期治療

東京女子医科大学 産婦人科学教室 講師 池田 俊一

婦人科疾患と鍼灸

・「月経困難症と鍼灸治療」

鑑別と治療指針

東京衛生学園専門学校 講師 鈴木 由紀子

「婦人科腫瘍」

早期発見・早期治療

池田 俊一

子宮は女性の生殖臓器であり、骨盤の中央に位置しています。子宮の出口付近（膣に近い部分）を子宮頸部、子宮の上部、袋の部分を子宮体部と呼び、それぞれの部位に生じるがんを子宮頸部癌または子宮頸がん、子宮体部癌または子宮体がんおよび、同じ子宮がんでも区別して考えられます。

婦人科で取り扱われる悪性腫瘍で最も多い子宮頸癌は婦人科癌の約 80%に達します。早期の段階で発見されれば、ほぼ 100%治療可能ですが、初期の子宮頸癌（がん）では全く症状がありません。癌が少し進行すると、月経でない時の出

血、性行為の際の出血や普段と違うおりものが出現したりします。その他に月経の量が増えたり長びいたりすることもあります。性交渉がないと性行為の際の出血を認めないため、子宮頸癌が進行してから出血を見ることがよくあります。近年では若年（10年代後半？20代）層に増えています。ウィルスの性感染によるものです。最近になって、子宮頸がんが発生しているほとんどの人に、ヒトパピローマウイルスというウイルスに感染していることが分かってきました。ただし、ヒトパピローマウイルス感染だけで癌になるのではなくプラスアルファの原因があることが考えられていますが、このプラスアルファが何であるかまだ分かっていません。ただ感染は性行為によってのみ発生し、それ以外での感染は極めて稀です。性交渉の経験がある方であればどなたでもヒトパピローマウイルスに感染する恐れがあります。ヒトパピローマウイルス（HPV）に感染する可能性があるということは、子宮頸がんにかかる危険性がありますので早期発見、早期治療のために定期検査をすることをお勧めいたします。

子宮体部がんの発生する率は子宮頸部がん比べて少なく、以前は10%未満でしたが最近では子宮体部がんの患者さんが増加傾向にあり子宮がん全体の2割？3割程度になってきました。特に都心部で生活する女性で発生する割合が高くなっており、ライフスタイルとの関連性が高いとされています。閉経後の女性、未婚の女性、妊娠・出産の経験がないまたは少ない女性、動物性脂肪を好む肥満体の女性に多く見られます。これらが子宮体がんは40歳代から増え始め50歳？60歳代で最も多く、閉経期前後から閉経期以降比較的早い時期の疾患であることがわかります。

子宮体がんは比較的初期のうちから不正出血が起こります。従って「月経以外におかしな出血が長く続く」、「閉経期のころに月経の上がりが悪い」、「閉経後に不正出血がある」といった場合は、子宮体がんを疑う必要があります。

卵巣は子宮の両側にある親指頭大の小さな臓器ですが、卵子を作るとともに女性ホルモンを分泌するという重要な役割を果たしています。卵巣にできる悪性腫瘍の事を卵巣癌といい、近年、子宮体癌同様、発生頻度が増えています。

卵巣癌の発生は40歳代？50歳代に多く見られます。未婚の女性、妊娠・出産の経験がない女性、母親や姉妹に乳がんや卵巣がんにかかった人がいる場合に多く見られると言われていています。卵巣がんも他のがんと同様、初期のものほど治る率も高くなるので早期発見・早期治療が重要ですが、卵巣がんは転移がしやすく症状も出にくいいため気が付いたときにはかなり進行していることも珍しくありません。卵巣癌は早期の段階ではほとんど自覚症状がないため早期発見が難しく「お腹が張る」、「下腹部にしこりや圧迫感を感じる」、「膀胱が圧迫されて尿が近くなる」などの症状がでてから病院を受診されることが多いです。これらの症状はがんが大きくなったり、あるいは腹膜播種といって腹腔内に種をまいたようにがんが拡がって炎症により腹水が溜まったときなどに見られる症状になります。さらに卵巣癌が進行すると胸腔内にまで拡がり、胸水が起こることがあります。胸水が溜まると息切れや呼吸困難、食事がのどを通りにくいなどの症状が出るようになります。いずれにせよ異常を感じたらすぐに婦人科を受診することが必要です。

「月経困難症と鍼灸治療」

鑑別と治療指針

鈴木 由紀子

一般開業鍼灸院を訪れる患者を見ると総体的に女性が多い。数年前の医道の日本社のアンケート調査によると、女性患者の主に訴える症状のうち月経不順、月経困難は第一位にランクされている。古典では婦人の病は、必ず大なり小なり月経異常が因をなす、とまで言われ婦人の治療は先ず月経を整えることが先決であるとされている。

また近年子宮内膜症や子宮筋腫などが若い女性に多く見られるようになり、月経困難症の要因となっている。これらについては鍼灸単独治療の是非も含めて鑑別診断や経過観察が重要な意味を持つ。子宮筋腫と診断され、手術をしたくない

がゆえに鍼灸院を受診するケースや、子宮筋腫と言われたが実は子宮癌であったなどのケースについて、どのような観点から患者と対応すべきか、鑑別の要点を述べてゆきたい。また専門医の受診が必要なケースや、経過を見ながら専門医との併療をした方が良い場合などについても考えてみたい。

鍼灸治療については多くの先達の先生方が報告をされている。その中からいくつかをご紹介するとともに、古典や中医学、さらに現代医学的にどのような考え方に基づいて治療を行うかを考察し、明日の臨床に役立てたいと考えている。



横田裕行先生



月経困難症と鍼灸治療 鈴木由紀子先生



婦人科領域のがん 池田俊一先生（東京女子医大講師）